



未来デザイン車座対話  
最終レポート

2025-01-24

## 未来デザイン車座対話 実施概要

### 目的

- さまざまな社会課題に対し、多様な視点（企業／大学／市民など）からの議論により、課題のもたらす影響について共有するとともに、それを克服した「ありたい未来社会」の姿を描き、その実現に向けて取り組むべきことを考える

### 概要

- 着目課題：日本における生産年齢人口の減少
  - 日本は本格的な「人口減少時代」に突入しており、今後、人口は年間100万人ペースで減少すると見込まれている。合わせて、生産年齢人口の減少も懸念されている。
  - 日本をはじめとする先進国は、戦後、人口増加を前提にした社会システムやサービスを構築してきた。現在、その前提が崩れつつあり、従来の社会システム・サービスの維持が困難になっている。
  - 人口減少社会へのスムーズな移行モデルを構築し、いずれ人口減少に転じる新興国をはじめ、グローバルに発信することを目指したい。

- 重要視点：テクノロジー（科学技術）の貢献可能性について
  - 人口減少／生産年齢人口の減少による影響予測や解決策の検討は、多くの専門家・有識者にてすでに議論されている。
  - 「未来デザイン車座対話」の中で改めて議論する意義は、朝日新聞社や東大政策系教員による市民目線・社会目線を取り入れながら、三菱電機や東大工学系教員による科学技術の視点をベースに、テクノロジーの果たすべき役割・可能性を見極めるため。

未来デザイン車座対話 実施プロセスと各回テーマ

## 2040年 生産年齢人口減少時代における「まち」のあり方

今の延長線上の成長が見込めないなかで、私たちの生きる基盤がどう変化していくのか、大都市・中核都市・地方をモデルに、社会インフラ・行政サービス・産業・文化などの複合的な変化（光・ありたい姿/影・タブー）を働き手の視点から捉えていく。

### 第0回

以下の、2024年度の未来デザイン車座対話の方向性を抽出する

- 全体テーマ
- 各回のサブテーマ

### 第1回

**人の観点（世代・価値観の違い）から、まちを再構築する**

「分断が進む世代の共存は可能なのか？」

### 第2回

**技術の観点から、まちを再構築する**

「先端技術によって引き起こされるパラダイムシフトとは？」

### 第3回

**公共の観点から、まちを再構築する**

「揺らぐ民主主義、誰がどう合意形成・意思決定していくのか？」

### 第4回

ありたい社会へのトランジション

「ありたい社会に向けて私たちができることは？」

## 未来デザイン車座対話（第1回～第4回）エグゼクティブサマリー

未来デザイン車座対話では、第0回を経て「2040年の生産年齢人口減少時代におけるまちのあり方」をテーマと決定。特に地方で人手不足やそれによるサービス等への影響が顕著となることを前提とし、「人」（第1回）、「技術」（第2回）、「公共」（第3回）の観点からまちのありたい姿、課題、解決策を対話してきた。対話で生まれた重要な論点から、2040年に向けた「ありたい社会へのトランジション」について提言をまとめた。

### 第1回 人の観点から、まちを再構築する

- 新たな世界観の特区、第二の故郷となる地方など、まちはマーケティング戦略や技術活用により独自色を出し、選ばれるまちになる
- 政令指定都市が、地方と東京の中間拠点として機能をより強化し、地方の受け皿となることが1つの解決策
- まちでのサービス低下する事実を住民自身が考えるには、事実と解決策の選択肢を伝えるためのコミュニケーションデザインが必要

### 第2回 技術の観点から、まちを再構築する

- 2040年には最適解を導くAIの役割は大きい。その他、各まちの個性・ニーズに応じて様々な技術を使い倒し、それぞれのまちの特徴を出していく
- バーチャル技術を活用し、人は1箇所ではなく複数のまちでの生活ができ、それを組み合わせた自由なライフスタイルを実現する
- 新技術に抵抗がある人を許容しながら、慣れ親しんだインターフェースから技術を受容してもらう必要

### 第3回 公共の観点から、まちを再構築する

- 政治的意思決定では、誰をどのように招き入れるかというフレーミング（同床）と、熟議・AIの活用など皆が納得するプロセスによる複数の価値観の重視（異夢）が必要
  - AI：価値観に関わらず、全員含め一番多い意見・中央値を出すのが得意
  - 熟議：価値観を重視して対話し、経過の中で各自の意見や関係も変わりうる
- 手応え感・納得できる意思決定が、住民のまちづくりへの主体的参加を促し、まちの持続可能性を高める

## 提言「ありたい社会へのトランジション」（第4回）

ありたい社会「多様な意見や価値観が共生できる社会」

- 防災訓練、お祭りなど、リアルな空間で交わる機会と、価値観や意識をもとにつながるポジティブな同床をつくる
- 中央値となる意見はAIで担保しながら、価値観の違う人同士がそれぞれを認め合い、一致・共感する部分を見出しながら、多種多様でクリエイティブな異夢をつくる
- まちを形成するプロセスにAIと熟議を、インフラづくりに技術を使うことで、多様な価値観が存在するおもしろく尖ったまちを実現する

## 提言：2040年 ありたい社会へのトランジッション（1）

---

### 1. 時代背景・前提条件

#### 時代背景：

- 日本は急速な人口減少と高齢化に直面し、「8がけ社会」（少子高齢化、生産年齢人口減少による労働力不足）の到来が予測されています。
- 特に地方は人口減少が顕著であり、インフラ維持や行政サービスの提供が困難になる地域が増加しています。
- 一方、省力化・省人化技術（AI、ロボティクスなど）の進化によって、社会全体の生産性向上を目指した新しい取り組みが始まっています。

#### 前提条件：

1. 生産年齢人口の減少：労働力不足により、従来の社会構造の持続が難しく、コミュニティが縮小します。
2. 高齢者人口の増加：医療・介護需要の増加により、社会保障費の負担が増大します。
3. 社会インフラの老朽化：インフラの維持・管理が難しくなり、災害時の復旧対応も遅延するリスクがあります。
4. 気候変動の影響：災害頻発による経済的損失が深刻化し、社会全体への対応力が問われています。
5. 若年層の夢や希望の欠如：若者が将来の社会に希望を持たず、現状維持を望む傾向が強まっています。

## 提言：2040年 ありたい社会へのトランジッション（2）

---

### 2. ありたい社会像

2040年のありたい社会は、以下の要素を含む「**同床異夢：多様な意見・価値観を持つ人々が主体者となり共生できる社会**」と定義しました。

#### 1. 価値観でつながるポジティブな「同床」：

- 地域住民が物理的空間を共有するだけでなく、価値観や意識を基にした関係性を形成する。

#### 2. 多種多様でクリエイティブな「異夢」：

- 一人ひとりが異なる夢やビジョンを持ちながらも、それぞれを認め合い、特徴のある尖ったまちを形成する。

#### 3. 熟議型の共生プロセス：

- 人の思考や意思決定をサポートする技術（AI）と熟議をかけ合わせ、住民のまちづくりへの主体的参加を促す。

対象となるまちの範囲：**中核都市**

中核都市のポテンシャル：

- 適度な人口規模とインフラが整備されており、持続可能性を高める施策を試行しやすい。
- 地域住民と都市部のリソースを橋渡しする「ハブ」としての役割を果たせる。
- 産業、教育、医療など、地方と都市を結ぶ多様な機能を兼ね備えた拠点となり得る。

## 提言：2040年 ありたい社会へのトランジッション（3）

---

### 補足. 同床異夢について

同床異夢：

同じ床に枕を並べて寝ながら、それぞれ違った夢を見ること。転じて、同じ事を行いながら、考えや思惑が異なること。（『デジタル大辞泉』小学館）

### 本提言における「同床異夢」の定義

同床： フレーミングされた一定範囲内（まち、地域、コミュニティなど）におけるアクターの集まり。

異夢： 各アクターが持つ複数の個性、異なる価値観が反映された様々なありたい姿。

※8がけ社会において、コミュニティを維持していくには、共生の意識を強く持つ必要が生じている。

そのためには、ポジティブな同床とクリエイティブな異夢を仕組みとして形成していく必要があると定義した。

## 提言：2040年 ありたい社会へのトランジッション（4）

### 3. ありたい社会に向けての課題

2040年「ありたい社会」を実現するために、生産年齢人口の減少に向き合いながら、コミュニティをどう再編していくのか合意形成に関する課題、先端技術でコミュニティの利便性を補っていくための課題があります。

#### 1. 合意形成の難しさ

- 背景：社会全体の価値観が多様化し、住民の立場や生活環境に応じて意見が異なるため、合意形成が難航しています。
- 課題の本質：従来型の一方向的な情報提供ではなく、住民が主体的に参加し、熟議を重ねる場が不足していること。地域住民の価値観が多様化し、公共政策や地域再編に関する合意形成が困難になっています。
- 例：災害復興や市街地の集約政策において「元の生活を守りたい」という声と「機能的な再編を望む」という意見が対立し、合意形成が進みにくい事例があります。

#### 2. 技術導入の格差と不信感

- 背景：無人化や自動運転などの技術が普及する中で、地域間の技術インフラの整備状況や情報格差が拡大しています。
- 課題の本質：技術導入に伴う説明や住民理解が不十分であり、利用者が受け入れなくなる選択肢や、安心して導入できる支援が必要です。
- 例：高齢者層の中には「無人サービスは冷たく感じる」といった不安や、「使い方がわからない」との声がある一方、若年層は利便性を評価する声が多い。

## 提言：2040年 ありたい社会へのトランジッション（5）

### 4. 解決策

課題である「合意形成の難しさ」に対処するために、AI等の先端技術も積極活用し、「同床異夢」という多様性を尊重し協働する理念を基盤とした熟議型の共生プロセスを構築し、持続可能な未来社会をデザインしていく必要があります。

### 未来社会デザインとしての熟議型共生プロセスの構築

#### 1. ポジティブな同床（共通基盤）を形成する：

1. 対象設定：共通基盤となる対象（テーマや生活領域）を設定し、目指す未来像を整理。
2. 目的関数と価値の見える化：AIを活用して地域の魅力を洗い出し、住民が共通理解できる指標を作成。
3. シナリオ提示：AIによる複数シナリオの提示（安定的な状況、危機的状況、バランス型など）を行い、異なる未来の姿を体感できる環境を提供。

#### 2. クリエイティブな異夢（ビジョン）を形成する：

1. 共通体験と疑似体験：防災訓練や体験型プログラムを通じて、異なる価値観を共有し、共感と対話の基盤を形成。
2. 価値観シミュレーション：AIを用いて多様な価値観を視覚化し、異なる視点を客観的に理解できるよう支援。
3. アジェンダセッティングと熟議：AIが対話内容を整理し、住民同士の対話を促進することで、異なる意見を結びつけ、「ありたい姿」への道筋を描く。

## 提言：2040年 ありたい社会へのトランジッション（6）

### テクノロジーの貢献領域：AIの積極的な活用

効果的な熟議を促すには、複雑に絡み合った課題を整理し、客観的な視点を提供することが必要となってきます。AIは膨大なデータを解析し、すばやくシミュレーションすることが可能となっており、効果的かつ公平な意思決定を支える役割を果たすことで、合意形成や政策立案の質を飛躍的に向上させる可能性を持っています。

### AI活用による効果

- **労働力不足の解消**：生産年齢人口減少により担い手が減るなかで、AIは人が担うべき作業を効率化・補完し、限られたリソースを最大限に有効活用するためのツールとなりうる。
- **公平性の確保**：地域によって人口密度や課題が異なるなか、AIが客観的なデータをもとに公平な施策を提案することで、住民間格差の是正が可能になる。
- **迅速な意思決定**：合意形成が難しく問題が複雑化し、意思決定を担う人材も限られる中、AIは短時間で多くの選択肢を比較・評価し、迅速かつ的確な決定を支援しうる。
- **変化への柔軟な対応**：AIは人口動態や社会構造の変化をリアルタイムで反映し、常に最適な対応策を学習し続けるため、急な変化などにも柔軟に対応できる。

## 提言：2040年 ありたい社会へのトランジッション（7）

---

私たちが持ち続ける根源的な問い

### 私たちは、異なる意見を持つ他者と、どう共生できるだろうか？

これまで「唯一の正解」しか認めてこなかった社会から脱却し、多様な価値観が共存し合い、それぞれの異なる意見を尊重しながら、共に進むための道をどう築けるのか？

この違いを乗り越え共生を育む方法こそが、未来社会デザインに求められる根源的な問いと考えます。

本提言における「共存」「共生」の定義

「共存」は、意見は異なるが存在を認めている状態。

「共生」は、異なる意見を認め合っている状態。